椎名文学論

――「美しい女」の制作意図をめぐって――

佐々木啓一

（一）

椎名麟三の作品「美しい女」は、昭和三十年五月から同年九月まで、五回にわたって「中央公論」に連載され、同年十月単行本として同社から刊行された長篇小説である。

発表形式は、四百字詰百枚をもって一回とし、四回にわたって連載するよう中央公論でもくろんでいたのであるが、椎名が途中で病気で倒れたため四回で完結せず、四回目（八月号）が中断されて、五回目で完結したのである。[註1]

椎名は、この作品によって、昭和三十年度の「芸術選奨文部大臣賞」（文学部門における）を受賞しているのである。その受賞理由には「椎名麟三氏は、『美しい女』（中央公論）において、社会の変動の中に誠実に生きようとする平凡人の原型を平易な文体で見事に描出、戦後文学に新しい人間像をもたらした功績と、その他の作品に対して云々」[註2]とある。

さて、このなかの「誠実に生きようとする平凡人の原型を平易な文体で見事に描出」の記事の示す通り、この作品は、椎名の初期のものに比較すると、内容は勿論、技法の上でもみるべき進展を示してきているのである。なかでも、表現意識の安定が文体面にも見事に表われ、実存的な気分を醸成するためにしばしば繰り返して用いられた観念的な言葉は稀薄なものになって、思弁的な重量感やそれにともなう晦渋さがなくなってきたのである。

ところで本稿の意図するところは、作品論にあるので、文体面の考察は別稿にゆずり、ここでは適宜援用するに止める。

そこで、筆者は記事にうたわれている「平凡人の原型」・「新しい人間像」について問題にしたい。

この作品の主人公に、そうしてその生き方になぜ「平凡人の原型」をみることができるのか、また、戦後文学における「新しい人間像」とはどういうものか、が問題になってくる。換言すれば、前者の解明は、直接に作品の構造分析をおこなうことによって可能となり、後者は、椎名の作品系列の鳥瞰的、抽象的把握と、それらの基盤にたってさらに作家及び戦後文学の問題との関連を考えてみることに

よって可能となってくるのである。

さて、本稿の場合は、前者の「平凡人の原型」を求めての作品論を予定しているので、作品系列をたどり、戦後文学論のなかで考察することを目途としている「新しい人間像」の究明については、本稿では直接問題としないで必要なところで関連づける程度に止めたいと考えている次第である。

（二）

さて、作品「美しい女」を論じるにあたって、文章の異同について若干触れておきたい。

初出の「中央公論」連載の部分と、いま筆者が便宜上使用している「新選現代日本文学全集25——椎名麟三集——」（筑摩書房版）との間には、多少の加筆・削除・訂正という改訂がおこなわれている。その多くは字句の訂正にとどまっている。例えば「その地方では、子供を間引くために堕胎薬としてほうずきの根を煎用する」の「ほうずき」を「なんてん」に、母親の亡くなった年令「七十四」を「六十四」に訂正している程度のものは相当数みられるのであるが、修飾相当語句の訂正については、割合、意識的に直しているようである。以下両書を比較し、略述するとつぎの通りである。

（初出）

私にそのような努力が出来たのは、あの笑い合った一瞬をとり戻したかったからだ。

（全集）

私はそのような努力が出来たのは、あの笑い合った、そこにあのほんとうの美しい女の感じられるような一瞬をとり戻したかったからだ。（異同の部分に傍点を附しておいた。）

或いは、私は、克枝を唯一絶対のものとしては愛していなかったかも知れない。だが、私は一生ともに年をとって行く平凡な愛としては、十分に彼女を愛していたつもりである。そして、あわれなことだが、私はその愛の十分さを知っていたのだ。

私が、克枝のことを考えていらだたしくなったり、きみを思い出して暗い気持に陥ったりしたとき、滑稽にもひろ子こそほんとうの美しい女であったかのように、否応のない力でその私をひきつけたからである。

私もその彼女にこたえて、彼女の手をにぎった。あたたかい手だった。その私は、情なくもあのほんとうの美しい女の像を思いうかべていたのである。

しかし彼女は、自分の家のある裏通りへまがるとき、泣きそ

或いは、私は、克枝を唯一絶対のものとしては愛していなかったかも知れない。だが、私は一生ともに年をとって行く愛としては、十分に彼女を愛していたつもりである。そして、私はその愛の十分さに生きることが出来るのだ。

私が克枝のことを考えていらだたしくなったり、きみを思い出して暗い気持に陥ったりしたとき、ひろ子は彼女こそほんとうの美しい女であったかのように、否応のない力でその私をひきつけたからである。

私もその彼女にこたえて、彼女の手をにぎった。あたたかい手だった。だが私は、やはり、あのほんとうの美しい女の像を思いうかべていたのである。

しかし彼女は、自分の家のある裏通りへまがるとき、泣きそ

うな顔で、忙しげに小さく手を振った。すると情なくも私の心のほんとうの美しい女がまたもや微笑したのである。私は仕方なく手を振った。

これらを比較しながらみてゆくと、「あわれなことだが」「情なくも」「滑稽にも」が全集では削除されているのである。しかも、それらの語句に代って、補足説明的な語句がはいっているのである。特に文の前後から考えて主人公がどうして「あわれなこと」とか「情なくも」とか思わなければならなかったか、判断に苦しむ場面の展開が多い。即ち、必然性がないように考えられる。この種の言葉は、椎名の初期の作品のなかで実存的効果と、それによる思弁的重量感を盛り上げる手法としてしばしば使用されたものであるが、この作品でも、その当時の自分を考えあわせて、暗い気分に沈潜したような時に、はしなくも筆癖となって表われたとも考えられる。また、勘ぐるなら、椎名は、ちょうどこの四章のこの部分を執筆中、病のために倒れたので、その直前の病状の進んでいた時の陰うつな気分が、そのまま作品の主人公の気分に反映してしまったのではなかろうか。ともあれ、この種の言葉を全集の方で意識的に削除した形でみるについては、このような内在的理由以外に外在的な理由があるのである。即ち、昭和三十年八月二十二日におこなわれた「美しい女」の「創作合評会」[註3]の席上、梅崎春生は「小さいことだけれども『情ないことに』云々ということばがたびたび出てくる。『情ないことには美しい女が現われた』とかいっていますが、あれは別に情なくないじゃないですか。やはりそれを反復することで効果を出そうとしているのかな」と。十返肇はこれに答えて「それと椎名さんの小説は感情が偶然によって転換するところが非常に多いでしょう。ふと思ったり突然気が変ることが多い。……ぼくは小説の中の人間の気持の動かし方というのはもう少し必然性をもった動かし方をしてほしいと思う」といっている。この作品に必然性を要求すれば、この作品の構成自体が逆にくずれてしまうものと考えているのであるが、椎名は、この批評に目をとめて、構成をくずさない程度において意識的に削除したと考えたいのである。

繰り返すようであるが、椎名の執筆当時の気持としては、自然に表われた筆癖なり、自身の病状から気分的にあの種の表現をとらしたものとも考えられる。この二点を考えあわせるならば、そのまま生かしておいた方がむしろよかったのではなかろうか。ところが、一方、椎名がこの種の批評に対して極めて素直に反応を示す点、作者の性格の一面を知り得るとともに、筆者は、作者自体の反応のよさに一抹の不安を拭い得ないものがあるように考えるのである。このことは、結末に近い部分及び結末の部分の書きかえにもみられるのである。

彼女は、いつものようにあわてて小さく手を振った。その彼女を見た瞬間、私は、彼女と一緒に死んでもいいような気がしたのである。

彼女は、いつものようにあわてて小さく手を振った。瞬間、私はひろ子は、この現実のなかに生きていないという気がしたのだった。彼女は、多くのひとに愛されるだろう。しかしそれ

うな顔で、忙しげに小さく手を振った。すると私の心のほんとうの美しい女がまたもや微笑したのである。で、私は仕方なく手を振った。

私は、平凡な人間なのである。電車にノッチを入れれば動き出すあの平凡な確実さの好きな人間なのである。異常なものにこそ、この人生の意味がかかっているのかも知れない。だが、平凡なのもそれに劣らない意味をもっているのだ。

人を軽いてもいいが車はこわすなというような意味を与えられて、それが極端に達したからだ。

私は、いまでも、この世の一切のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、光と力を与えてやりたいと願っ

は、どこか遠いところにいる彼女としてであるにちがいなかった。そして私は、どんなに彼女を愛していても、最後の点に於ては、拒絶しなければならないと感じたのである。

組合の人々は、いささかの羨望をまじえた軽蔑をもって、私を特別扱いしている。だが私は、平凡な人間なのである。電車にノッチを入れれば動き出すあの平凡な確実さの好きな人間なのである。だが、私の平凡さは、異常なものを拒否するのだ。

人を軽いてもいいが車はこわすなというような意味を与えられて、それが極端に達し、私にそれが許せなかったからだ。

私は、いまでも、この世の一切のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱を与

ている。私は、そのためにだけこの手記を書いたのだ。そしてこの白髪のまじって来た男は、毎日克枝と夕食の膳に向いあいながらこういうのだ。（終り）

えてやりたいと願っている。個人的なものであれ、社会的なものであれ、異常なものは、もうごめんだ。そして私は、そのことを訴えようと思ってこの手記を書いたのだ。そうしてこの白髪のまじって来た男は、毎日克枝と夕食の膳に向いあいながらこういうのだ。（終り）

いま指摘した結末の文章について加筆・削除・訂正の重要な部分のみをみてゆくと、「彼女と一緒に死んでもいいような気がした」が「どんなに彼女を愛していても、最後の点に於ては、拒絶しなければならない」に訂正され、以下みてゆくと、「私の平凡さは、異常なものを拒否するのだ」・「それが極端に達し、私にそれが許せなかったからだ」・「それとたたかい得る光と熱」・「異常なものは、もうごめんだ」・「そのことを訴えようと思って」となっている。この一連の語句をみながら、初出と比較してみると、人間の愛情の拒否、世の中の異常なもの、極端なものの拒否を断定的な調子でのべていると同時に、一方では「たたかい得る」・「訴えよう」と積極的にアクチュアルな主張をしているのである。それから細部にわたるが、「それとたたかい得る光と熱を与えてやりたい」の「光と熱」は、初出では「光と力」になっているが、この訂正は、冒頭が「人なみの熱い血を通わせ、生命の光をあたえてやりたい」であったので、「力」を「熱」に訂正したのであろう。

さて、それでは、なぜ椎名は特にこの結末の文章の比較的重要な部分についての加筆・削除・訂正をあえておこなったか、という点についてである。

作者は「平凡」を意識的に前面に押しだそうとする余り、かえってそれが主人公の意識を曖昧なもの、妥協的なものにさせて、「一緒に死んでもいいような気がした」・「だが平凡なものもそれ（異常なもの・筆者註）に劣らない意味をもっている」という表現をとるようになったのではなかろうか。初出を読み返した作者が、結末の部分において、自己の意図する形而上学的な問題を訴え得ないまでに甘い、一種のオプティミスティックなイメージを読者にもたせているのではないか、と察しての改訂とみたいのだが、これは単なる筆者の臆見に過ぎないだろうか。このことは「平凡」を主題にしているという各傍証的な発言に対する、作者の意図にかかわる問題であると考える。

椎名の、この妥協的な結末を批判して梅崎以下の三人は、前出の合評会で口をそろえて批評しているのである。「物語に非常になだらかな起伏があるだけで終ってしまって、盛り上ったところが幾つもあるということはない。悪くいえばダラダラ話が続いている」（梅崎）とか、「四百枚使ってその結論が少し弱い」（十返）とか、「短篇小説のテーマだ。百枚でも三人の女は出せたと思う」（平林）というふうにのべている。

そこで、さきの梅崎の指摘と、この三人による合評の部分とでは、椎名という作家主体の、批評に対する反応の仕方にはおのずから違ったところがあったと考えるのであるが、この種の批評が一つのモメントになったことは否めないものと考える。しかし、平林の発言にある「短篇小説のテーマだ」という点と「百枚でも三人の女は出せた」は、平林の、意図に対する理解の不十分さと、女性の立場としての、むしろ思い過した批評であると考える。ところが、この種の発言があることは、一面において、主人公をはじめ登場人物の形象化にいま一段の工夫を要するということも考えられるのである。

（三）

さて、㈢の合評会での発言を再び問題にするが、この小説を読み終ったときに、何か作者自身がこの人生に満足しているような印象を与えられ、悪くいうと人間は平凡でいいんだというこの境地に作者が安心立命してしまったような危険性を感じた（十返）とか、平凡さを強く押し通そうという意図があり、非常に平凡で日常を愛し仕事を愛するという主人公に対して、他の者はみな破滅するのに彼だけは日常の確かさをもって生きている。それがテーマだ（梅崎）とか、平凡ということの発見、それは椎名の小説の上での発見であると同時に椎名自身でもあった（平林）と発言している。ここで三人ともに「平凡」という言葉を使っているが、前にのべてきたように、そうしてさらに梅崎の発言を通しても「平凡」は、この作品の意図を解明する場合の中核的な媒体の役割を果していると考えるのである。

椎名はこの作品に関する制作意図を、自身で次のように説明しているのである。

あの作品の一つの意図はこうだったのです。僕が非合法運動をやっているときに、文学にちょっと接したわけです。（中略）

で、その当時感じたのですけれども、労働者を描いている人はみなインテリだ。小説のなかで労働者として生きている場合でも、やはりインテリである。（中略）僕たちの現実をちっとも知らない。僕たちのニヒリズムを知らないし、僕らの日常に交わしている下らない冗談も知らない。ただ語られていることは非常に前衛的な理想的な労働者が描かれている。そういうものへの反感があって（中略）それで一度労働者を描きたいと思っていたわけです。しかし自分自身が労働者を描けない場所に置かれてしまったから労働者に入って行けないし、入って行く場合にはアイロニーを感ずるか無意味を感ずるかどっちかだった。[註4]

椎名が語っている通り、「美しい女」の制作意図は、党幹部のインテリに対する反感及び前衛的・理想的な労働者を描くインテリを中心にしたプロレタリア（左翼）文学に対する反感である。そうして、その反感が作者をして制作へと導いたことを明確に物語っている。そこで、作品の上でこれを確認してみると、結末の部分で椎名は主人公「私」に次のように語らせているのである。

私は、いまでも、この世の一切のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱を与えてやりたいと願っている。個人的なものであれ、社会的なものであれ、異常なものは、もうごめんだ。そして私は、そのことを訴えようと思ってこの手記を書いたのだ。

「きちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡」「異常なものは、もうごめんだ」と過去の労働運動に対する憤りと反感とをこめて訴えているところ、作品を通すことによって、作省の意図をより明確に把握することができるのである。

さて、この点を作品の具体的状況――事件の展開と共に動く実際の人間関係のなかで検討してみると、宇治電鉄の交通労働者の同僚青柳に誘われて、山本の下宿に集った主人公木村末男は、この集会が共産党宇治電細胞の第三回委員会のメンバーであることを知って驚くのである。席上、オルグ活動に上部組織から派遣されたインテリの若い男（「生い立ちと文学」[註5]によると神戸商大の学生で共産党員であったという）から「実際、日本の労働者には、あなたのように、曖昧で臆病で卑屈な奴隷根性のものが多すぎる」と極付けられ、「革命をおくらせているのは、実にあなたのような人々なんです」と凄まれる。その後、一斉検挙で肝心の幹部の者は事前にそれを知って逃亡、嫌疑をうけた主人公は特高の手で留置場に放り込まれるのである。そんな木村は、共産党とはなんの関係もなかったのである。木村は共産党を「何か秘密めき何か恐ろしげな顔付をした団体であり、私のような単純な労働者には何の縁もない団体だ」と思い、「共産党の悪魔めいた顔付」「この私鉄にも共産党のビラが撒かれたが、その文句も書き方も、悪魔が吠えている」と感じ、「臆病な話だが、悪魔めいた一切がきらいなのだ」と言い切っている。臆病で、卑怯で、無自覚な奴隷根性の持主のように極付けられた木村が、逆に共産党を「単純な労働者には何の縁もない団体」であるとそっぽをむくとともに、前衛的なインテリ労働者とその組織に悪魔性を見抜いているのである。この作品の意図する前衛的なものに対する反感は、早速、左翼からもの凄い攻撃を受けているのである。即ち理由は「共産党を悪魔としてみている」という点なのである。作者

としてはそんなことは問題の中心でなくて「実践の陰に隠されている悪魔性」を暴露しただけなのである。組織悪の問題なのである。作者自身「悪魔的にならないで、ほんとうの意味の人間的な実践としてやって行くのには何が必要かという問題を提起しただけです」[註6]と、むしろその種の組織に反省を求めているのである。そうして、また、久山の討論会の席上「僕らが入るときは、何でもかんでも党員にしろというようなことで、僕らみたいなものが党員になったわけです。でも、労働者はかくしなければならぬという絶対命令みたいなものを感じておったのは事実です。それからやはり労働者というのは辛いですね。ただ僕はその当時、党の地方の指導部、地方委員会といっていましたが、それに対する反感は確かにあったので、それはこの間『美しい女』にも書いたのですけれども、つまり個人の具体的な状況というようなのは全然問題にならない」と憤りをもって回顧し、さらに最近、田中英光の「除名問題」を取り扱ったなかで、組織については、その組織が人間的にみえるときでさえ、非人間性を秘めていると言及し、組織で問題になるのは、いつも全体の問題であり「一人の人間の内面的な真実だとか、個人的な自由といったものは黙殺されるのだ。（中略）私もある組織に参加して苦労したことがあるが云々」[註7]とのべているが、これによっても椎名の組織悪に対する反感が、単なる観念的な判断にもとづくものでなくて苛酷な条件のもとにおいて体験し、形成された信念である点、如何に根強いものであったかがうかがえるのである。また椎名の属している教会機関誌「指」のなかでも「田中英光の問題」として組織や共同体のことに触れて「たとえそれらが人類の幸福を目指すものであっても、それらに所属する人間の何等かの自由を制約するということは否むことはできない。（中略）文学者としての英光は、そのような人間について行けなくなったのだということは事実なのだ」[註8]とのべて田中英光の自殺について弁護しているとともに、組織の犠牲になった自分の立場を同じ作家として徹底的に追求してゆこうという執拗な態度をうかがうことができるのである。

椎名は事実、昭和三年春から宇治川電気の電鉄部に車掌としてはいり、共産党宇治電細胞のキャップとして組織活動に従事、同六年検挙され、転向により同八年懲役三年執行猶予五年の判決を受けて出所しているのである。そうしてこの作品は、昭和の初期から大弾圧、中日事変、太平洋戦争と多難な内外の情勢のなかに、「赤」とその転向者という烙印をおされながらも一労働者として実に「平凡」をモットーとして生き抜こうとする魂の彷徨を描いたものである。

ここに、椎名の意図を作品のなかでは勿論、他の著作での発言によっても確認することができるのである。

（四）

「美しい女」の舞台についてはすでに㈢で言及したのである。ところが、この作品は、作者自身の若き日の体験を思い浮べて直ちに構成され、表現された自伝的作品では決してないのである。すでにのべたように、この作品の意図したものは、自伝的要素を含みながらも過去の悲惨な状況の再現ではなかったのである。しかも、現実には作者自身は厳密な調査と再検討を必要とし、また事実、実地踏査を試みているのである。

椎名は座談会の席上「最初の方は、関西が舞台になるものですから、関西で書こうと思っています。というのは、関西でも大阪と神戸、明石と姫路、その辺が舞台になるわけですけれども、僕は向うの言葉をすっかり忘れちやった。思い出してもそれが間違ってるんだ。だからそこに行って、まずそれぞれの訛りから覚えなければならない」[註9]とのべている。それから、この作品の完成後「私は、一昨年、関西へ数回旅行した。『美しい女』という小説の舞台が関西なので、その調査のためである」[註10]と発言している。また、前記討論会の席上「僕は現在作家としては、そういう労働者（毎日を平凡に生きているそのままの労働者・筆者註）の自分との連帯感というものが、一応観念的にはつながって行っても皮膚の上で切れているわけです。それで昔の職場に帰った。『美しい女』を書く前の年に四回くらい行ったし、次の年は三回か行っています。職場に入って昔の人々と会ったり生活して、一緒に酒を飲んだり話をしたり、あるいは職場の電車に乗ったりしていたわけですが、そうやっているうちに昔の僕の持っていた労働者の感情というものが皮膚の上に甦って、仲間と言葉でなくつながって来たのを感じた。これなら書けると思っていたわけです」とのべている。

そこで、まず考えなければならないことは、椎名自身、その意図を作品のなかで具体化するための構想の一環として、若き日の職場を選定したということである。確かに「美しい女」の舞台は終始一貫して関西が舞台になっている。ところが、作者の執筆前に語っているところでは「最初の方は、関西が舞台になるものですから、関西で書こうと思っています」である。そうすると、少くとも最初の予定としては、関西以外にも舞台を展開していこうという野心的な構想をもっていたにちがいない。そうして「前の年に四回くらい行った」は、昭和二十九年のことである。従って座談会の催された昭和三十年二月下旬の頃までは、関西に腰を落着けて、最初の部分を「関西で書こう」と思っていたわけである。ところが、事実はすでにのべたように全部関西が舞台になっている。その理由はどこにあるのであろうか。

作者がそういう意図をもつて、昭和三十年二月下旬以後、関西へ踏査に訪れるのは、「向うの言葉をすっかり忘れた」こと、従って「まずそれぞれの訛りから覚えなければならない」ことも重要な理由の一つなのである。それから、作者ものべているように自分と労働者との連帯感が観念的にしかつながりをもっていないので、皮膚の上でじかにつながりをもちたいと考えていたからである。むしろ後者の方が意図からいっても重要なものになってくるのである。そうして、かっての仲間と生活したり、酒を飲んだり、電車に乗ったりすることを通して観念的なつながりが稀薄になって、かっての感情が皮膚の上に甦って言葉の問題でなく、膚の感覚の上でつながってくるようになってきたのである。「これなら書ける」という作者の意図実現への自信の前に、初期の構想のある部分は変更を余儀なくされたのではないかと考える。筆者はこの章の最初で、作者の意図は単なる過去の悲惨な状況の再現ではないということをのべた。椎名のその当時の問題意識や個々の細部にわたる体験は、いまさら踏査を必要としないほど、自身が一番よく知悉しているはずである。

昭和二十六年十二月のクリスマスに赤岩栄牧師からプロテスタン

トの洗礼をうけた作者は、キリスト者としての自覚のもに再出発したのである。従って交通労働者当時の感覚の再現だけでもって描いたのでは決してないのである。即ち、この作品では、過去に対する反感も単なる憎悪のみをこめての反感ではなかったと判断できる。キリスト者として「平凡」に生き抜こう、異常なものを拒否しよう、という自覚の上に立ってのことであり、さらにそこにむしろ信仰を通じて信念化された独自な意図を貫ぬくための確認にあったと考えるのである。「労働者と自分との連帯感は観念的なつながりである」とのべた作者は、長い踏査の末に、観念的な壁を破って、じかに膚で感じとるキリスト者としての平凡な自由を甦えらせると同時に、一方では、逆に「復活のキリストを、文学的なイメージとして浮べる」という形而上的感覚をも意味する観念化に成功したのである。[註11] ここに作者自身にまつわる悲惨な暗い谷間の属性は陰をひそめ、さらに高い次元に自由に再生する根拠をもつことができたのである。即ち作家主体は、踏査を通して過去の再現及び再確認を企図したのではなくて、この種の再生的思考を通して長い谷間からの訣別とキリスト者の自由を欲したのではなかろうか。即ち、一見無意味にみえる数度の踏査は、作者の願うキリスト者の自由を確認するためのアンチテーゼの役割を果したことになったのではないかと推論するのである。

椎名は「深夜の酒宴」から「赤い孤独者」に至る作品には、自己否定を極限にまで追いつめて実存的な苦しみを主人公を通してぶちまけるという意図が強烈すぎて、自己のイメージをもてあまし、作品の個々の人物にそれがうちとけず、むしろ、異様なまでに不自然[註12]に戯画化してしまって「観念が浮いて飛びまわっている感じ」という亀井勝一郎をはじめ、諸家の批評を蒙った。また本論のはじめにものべたように、思弁的重量感や晦渋さがつきまとっていたのである。ところが受洗以後の作品を検討してみると、そのような過去への訣別を明確に意識しているとともに、客観化された次元に立って過去を決定的態度で眺め得る余裕をもち得たのである。従って度重なる踏査は、はじめの構想を変更したかもしれないが、作者の志向する受洗以後の一貫した信念――彼のいう「生きる道」には何らの変質をもきたさなかったのである。

（五）

さて、椎名は、同じ職場を描いた「自由の彼方で」においては、自身が新たに生まれかわるためにのこした遺書としての意味をもっていたのである。この作品では、作者はキリストの復活を信じ、すべての過去をつきはなして眺める位置に立っている。即ち、自由の位置に立って彼方である自分のかっての陋劣さをもった当時に帰り、その総決算をやったのである。作者も銘打っているようにこれは自伝小説だったのである。そうしてこれの素材の面での延長の上に立った作品と考えられる「美しい女」では主人公をはじめ他の同僚、女性達を生き生きと描きだしているのである。個々の人物がプロレタリア文学にみるような前衛的・理想的な労働者ではなく、皮膚の上でつながりがあるように肉付けされているのである。しかもこのような労働者を描くことのできたのはキリストに根拠をもったからである。このことについては、モチーフの問題として論じる予定で

あるからここでは触れないことにする。ただ作者の言葉を借りるならば「この作品(『自由の彼方で』)を書き得たのは、その場所を持ち得たからであるが、その場所(全生涯を語るに当って、よしといい得る精神的な場所)は、キリストから与えられたものである」(傍点筆者・文中括弧の部分は筆者註)として、キリストをモチーフのなかに明確に描いていると断定できるのである。そうして、このキリストを意識したとき、椎名は「平凡」ということを問題にしてきたのである。即ち「平凡」を主題にしてきたのである。即ち「平凡」を主題にしようという自信が湧いてきたのである。[註13]労働者を皮膚の上での実感でうけとろうという「一種の肉体的な確信」があったのである。作者は、労働者への深い連帯感を問題にして、中野重治の「指輪」を批評するところで「まず中野さんは、労働者を抽象的にとらえていると思う。こういう『戦旗』を読もうという労働者はこれほど浅薄ではないと思う。それからもう少し労働者を愛してやってほしい。愛情が足りないと思う」[註14]と、インテリ作家を攻撃し、椎名自身の意図するところをはっきりと言いきっている。

作者が皮膚の上で実感し、肉体の上で確信した体験の数々は、決して単なる私小説的な発想をとってはいなかったのである。この作品の主題である「平凡」こそ、作者の表現しようとする観念であるとともに、「生きる道」を示す肉体的な確信でもあったのである。そうして「美しい女」には「平凡人の原型」が見事に描出されているのである。

臼井吉見は「美しい女」を評して「現実ばなれとも見える方法を駆使したこの小説が不思議に現実感の濃いものになっています。(中略)左翼の小説などのぞいてみても『労働者のあの根源的な気分、幾分ニヒリスチックな気分』について、なんにも知らないと思ったと言っています。[註15]『美しい女』がほんとうの意味での自伝小説であるゆえんです」とのべている。臼井のいう「現実ばなれとも見える方法」は本稿で検討できなかった部分であるが「復活のキリストを、文学的なイメージとして浮べる」という形而上的な方法をこの作品に適用したがために、かえって「不思議に現実感の濃い」作品になったのである。作者が皮膚の上で実感し、肉体の上確信した数々の体験に、キリストに根拠をもった作者の制作意図によって十分に作品のなかで生かされ「ほんとうの意味での自伝小説」となりえたのである。このような椎名を評して小松伸六は、椎名の初期の作品「深夜の酒宴」「重き流れのなかに」「永遠なる序章」と、「美しい女」とをよみくらべてみて、初期の作品には戦後という一時代の表現であることは再確認したが、読みとおすのはつらかった旨をのべ、「『美しい女』には、椎名氏がもつ独自の生命様式『庶民意識の重み』というものが、表面にあらわに出ず、浄化されて、平明な文体と調和して、安定した世界をつくっている」[註16]とのべている。小松のいうように「庶民意識の重み」というものが表面にあらわにでないで、一種カタルシスされた世界を現出していることは、「きちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さ」を打ち出そうとする椎名の意図が十分成果を収めていることを物語っているのである。さらに笹淵友一博士は「椎名氏の文学で、ほんとうに人を打つ力は庶民的な善意とでもいうものでしょうね。あれは確かにいままでの文学の持たなかったもので、これは、あの人の人間性の美し

さだと思う」[註17]とのべるとともに、椎名は全く新しいタイプの作家で非常に期待していいと明言しているが、椎名のキリスト者としての信念が、生地のままの人間性の美しさにさらに磨きを掛けられて、作品に十分な反映をみているのである。

異常なものに対する「平凡」をもってこの作品を貫こうとする椎名の意図は、キリストに根拠をもつことによって異様なまでに主人公木村の意識のなかに根をおろしてしまったのである。「悪魔めいたもの」と闘うために平凡に振舞う主人公には、確かに笹淵のいうように「人を打つ力」があるとともに、主人公をも含めて彼とかかわりをもつ同僚・女性には「庶民的な善意」が十分にうかがえるのである。そうしてそのような生き方にはキリスト者としての生き方が隠されているのである。これは前にものべたようにモチーフに関連をもつ問題を蔵している。それだけに「美しい女」を一つの作品として取りあげてみても数多くの問題を胚胎しているのである。筆者はこれらの問題については稿を改めてのべてみる積りである。

さて、作品論の一環として「平凡人の原型」を意図の面から論じたのであるが、紙数の都合もあってごく要点を拾ったのみで終ってしまったことをお断りする。

戦後派文学の作家の一人である椎名は、今後とも「美しい女」に描かれた「平凡人の原型」という庶民的な意識の上に出来上った型を、恥と罪の多いこの人生にさらに一層描き続けてほしいと期待するのである。

椎名は本格的なキリスト教文学の作家である。それは「美しい女」をはじめとして、以後の作品の内部構造を通してたしかめることができるのである。

ここに「美しい女」の作品分析の意義の重要さを確認することができたのである。

（昭和三十八年六月十日稿）

註1　この発表形式は、「新しい長篇小説」として企画され、昭和三十年一月号から四月号まで、四回にわたって、三島由紀夫が「沈める滝」を連載、その後をうけもって、五月号に、椎名が「美しい女」を、時を同じくして同号に堀田善衛が「記念碑」を連載、堀田は四回（八月号）で予定通り完結、その後を、伊藤整が「若い詩人の肖像」を四回にわたって連載し、ちょうど一年間で、四人が交替で受けもったのである。

註2　授賞規定については、文部省主催になる、芸術選奨文部大臣賞の授賞規定の要項があり、昭和三十年度のこの賞の文学部門における選考委員は次の七氏であった。

青野季吉・臼井吉見・河盛好蔵・中島健蔵・中村光夫・山本健吉・吉田健一

註3　「創作合評会」101回「群像」・昭和三十年十月号・出席者　梅崎春生・十返肇・平林たい子

註4　久山康編「現代日本のキリスト教」・第四章　椎名文学の形成・昭和三十六年十一月刊・創文社

註5　「現代日本文学講座」小説7・昭和三十七年二月刊・三省堂

註6　久山康編「近代日本とキリスト教」・大正・昭和篇・昭和三十一年十一月刊・創文社

註7　「新潮」昭和三十七年十二月号

註8　「指」一九六二年三月号・赤岩栄編集・上原教会発行

註9　「中央公論」昭和三十年四月号「新しい長篇小説」――その発表形式と作者の態度――（この座談会は、昭和三十年二月二十六日におこなわれた）

註10　椎名麟三著「私の聖書物語」昭和三十四年八月刊・中央公論社

註11　「文学界」――文学の擁護――昭和三十七年三月号

註12　「群像」昭和二十七年二月号――椎名麟三論――

註13　椎名麟三著「愛と死の谷間」の、佐々木基一の解説・昭和三十五年四月刊・角川文庫

註14　「創作合評会」105回「群像」・昭和三十六年二月号・出席者　椎名麟三・武田泰淳・埴谷雄高

註15　臼井吉見著「小説の味わい方」のなかの「自伝小説と自己形成」より・昭和三十七年六月刊・新潮社

註16　「解釈と鑑賞」――戦後文学特集号――昭和三十七年四月号

註17　月刊「キリスト」――近代文学の病巣にメスを――昭和三十七年六月号